

# 成人期の親子関係に関する研究 Parent-child Relationships in Adulthood

田仲由佳 石井国雄  
TANAKA Yuka, ISHII Kunio

## Abstract

The aim of this study was to explore parent-child relationships in adulthood. In this study, 1404 men and women aged 20-59 years old were asked about their demographic variables (age, child, marital status), perception of aging parent, consciousness and feelings for their parents. The main results were as follows. On the whole, both men and women tend to receive psychological support of their parents from 20s until 40s. Men who had children or got married reported positive consciousness and feelings. On the other hand, divorced people tended to report negative feelings for their parents. These results suggest that parent-child relationships in adulthood may change through various life events.

キーワード：成人期，親子関係，老い，ライフコース，多様性

**Keywords:** adulthood, parent-child relationship, aging, life course, diversity

## 1. 問題と目的

長寿命化により，成人以降 40 年あまりの間，親との関係が継続することが稀ではなくなった。成人同士の親子関係が長期化する中で，親側，子ども側の発達段階やライフイベントに伴い，親子双方の意識や関係性も変化していく可能性があると考えられる。しかしながら，従来日本では，成人した子どもと親との関係は安定しており変化が少ないという見方がなされ，成人期の親子関係を扱った研究が他の発達期と比較して顕著に少ないことが指摘されてきた（小野寺，2014）。近年，そうした状況に変化がみられ，そのきっかけとして，老いゆく親との付き合い方という視点での関心が寄せられるようになったことが挙げられる。また，核家族化や単独世帯の増加など，成人期のライフスタイルの多様化に伴い，成人同士の親子関係に新たな課題が生じることも予測される。そこで，本研究では子どもが成人を迎えた後の，成人同士の親子関係に焦点を当てることとする。

子どもが青年期以降の親子関係に影響を及ぼす要因の一側面として，子ども側の発達段階やライフイベントが挙げられる。例えば，母親と成人した娘との関係について北村・無藤（2003）は，娘の結婚や出産などのライフイベントを経ることで，母娘の心理的距離が近くなり，互いの親密性が高まる傾向があることを示している。

このように，成人以降の子ども側の発達の变化やライフイベントが親子関係の在り方に影響を与えることに加え，成人同士の親子関係は，親側の変化によっても影響を受けることが予想される。その一つが親の老いであり，池田（2017）は，青年期以降も親との関係が継続する中で，子どもは親の老いを認知するようになり，そのことが親子関係に新たな

変化をもたらすとともに、子の発達を促すことを指摘している。一連の研究の中で、池田（2017）は、子ども側から認知する親の老いという視点から老親との関係について検討しており、親の老いを否定的に認知しているほど父親と母親の老いへの悲哀、父親の老いに対する不安、母親の老いに伴う負担懸念が高いこと、親の老いを肯定的に認知しているほど老いた父親と母親への配慮や母親の老いによる世代継承性が高いことを示している。また、父親の老いへの悲哀は 30 代の男女ともに親の老いの肯定的認知と否定的認知の双方と関連しており、青年期から成人期にかけて、親の老いは両価的な意味合いを有するようになるのではないかと述べている（池田，2017）。

ここまで述べてきたように、成人同士の親子関係は、子ども側、親側の発達段階やライフイベントを通して変化していくことが予測され、そうした変化に対応しうる親子関係の在り方を模索していく上での心理学的知見が求められている。しかしながら、これまで子どもが成人を迎えた後の親子関係を扱った研究は散見される程度であり、それらも青年期から成人期への移行期を扱ったものや、母娘関係に限定したものが多くを占める。成人期の親子関係を広くとらえる上では、幅広い年代の人々を対象とした調査を行うとともに、男女双方の知見を見出していく必要があるだろう。

以上をもとに、本研究では生涯発達の文脈から成人同士の親子関係に焦点を当て、それらに関連することが予測される要因を取り上げる。具体的には、成人前期（20・30代）、成人中期（40代・50代）の者を対象に、子ども側からの親に対する意識や感情をとらえ、それらに性や年代、子どもの有無、婚姻状況などライフスタイル要因がどのように関連しているのかを検討する。加えて、親側の発達の変化である老いを子ども側からどの程度認知しているかが、親に対する意識や感情とどのように関連するのかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 調査時期と手続き

2021年2月および2022年2月に学術調査を専門部署として置くリサーチ会社「楽天インサイト」を通じ、20歳から59歳までの男女を対象とするweb調査を実施した。2021年、2022年ともに1000名を対象とし、2回の調査で計2000名（男性1000名、女性1000名）の協力を得た。年代・性が均等に割り付けられるようにデータを収集するとともに、スクリーニング項目として家族構成および主な職業を問う質問を設定し、父親・母親の両方もしくはいずれか一方の親がいると回答した者（学生を除く。）に対し、その後の質問項目への回答を求めた。

### 2.2 分析対象者

調査協力を得た20歳から59歳までの男女2000名のうち、本研究では父親・母親ともに「いる」と回答した1404名（男性702名、女性702名）を分析対象とした。なお、回答者の婚姻状況に関して、本研究では死別者の人数が6名と少数であったため、婚姻状況による比較を行う際のみ死別者を分析から除くこととした。

## 2.3 調査内容

属性：年齢，性別，職業，婚姻状況，子ども（義理の子どもを除く。）の有無

親の老いの認知：親の身体的・心理的・社会的老いを子ども側からどの程度認知しているかを測定するため，若本・無藤（2006）を参考に6項目を作成した。項目例は，「身体能力の衰えを感じる」（身体的老い），「理解力や判断能力の衰えを感じる」（心理的老い），「人付き合いの減少など社会関係の老いを感じる」（社会的老い）である。父親・母親についてそれぞれ6件法で尋ね，合計得点を項目数で割った平均値を算出し，父親の老い得点，母親の老い得点とした（得点範囲は1-6点）。

親に対する意識：池田（2014）による親に対する感謝感情を測定する項目等を参考に，4領域計16項目を作成し5件法で回答を求めた。4領域の内容は，援助してくれることへのうれしさ（「親は私のことを心配してくれる」など5項目），親への心理的援助（「私は親の精神的支えになっている」など5項目），親との対等性（「私と親とは対等な関係である」など3項目），親への養護性（「親は私にとって守るべき存在である」など3項目）とした。それぞれの領域の合計得点を項目数で割った値を各領域得点（得点範囲は各1-5点）とした。

親に対する感情：父親・母親それぞれに対する感情を，ポジティブな内容を表す5項目（頼っている，尊敬，信頼している，ありがたい，気楽に感じる），ネガティブな内容を表す7項目（うっとおしい，わずらわしい，いらだつ，つまらない，信用できない，軽蔑する，嫌いだ）で尋ねた。回答は5件法で求め，各合計得点を項目数で割った平均値を算出した（得点範囲は各1-5点）。

## 2.4 統計解析

本研究では，父親・母親ともに「いる」と回答した1404名（男性702名，女性702名）を対象に，親に対する意識，親に対する感情，親の老いの認知を従属変数として，回答者の性および年代（20代，30代，40代，50代），婚姻状況（未婚，既婚，離別），実子の有無（あり，なし）を独立変数として，*t*検定や分散分析を実施した。なお，必要に応じてBonferonni法によって修正した多重比較を実施した。さらに，父親・母親の老いの認知と親に対する意識・感情の相関を，男女および2つの年齢層に分けて検討した。これらの分析を行う際，有意水準は5%とし，統計解析はIBM SPSS Statistics version 26を用いた。

## 3. 結果

### 3.1 分析対象者の属性

父親・母親ともに「いる」と回答した1404名（男性702名，女性702名）の平均年齢は，男性36.92歳（*SD*=10.395），女性37.03歳（*SD*=10.496）であった。分析対象者の属性をTable1に示す。

### 3.2 親に対する意識と感情の男女差

分析対象者1404名（男性702名，女性702名）の親に対する意識（4領域）と感情の男女差を検討するため，*t*検定を行った。その結果，親に対する意識では，援助してくれ

Table1 分析対象者の属性  $n=1404$

		$n$	%
主な仕事	正社員	788	56.1
	公務員	101	7.2
	パート・アルバイト	191	13.6
	派遣社員	22	1.6
	契約社員	42	3.0
	自由業	25	1.8
	自営業	45	3.2
	自営業の家族従業者	10	0.7
	専業主婦・専業主夫	106	7.5
	無職	62	4.4
	その他	12	0.9
婚姻状況	未婚 <sup>※</sup>	671	47.8
	既婚 <sup>※</sup>	632	45.0
	離別	95	6.8
	死別	6	0.4
実子の有無	あり	549	39.1
	なし	855	60.9

※未婚は今までに結婚したことがないこと、既婚は内縁関係や再婚も含むこととした。

二要因分散分析を行った。

はじめに、男性の結果を Table2 に示す。親に対する意識では、援助してくれることへのうれしさおよび親への心理的援助で子どもの有無による主効果がみられ、男性では子どもがいる者の方がいない者よりも得点が高かった（それぞれ  $F(1,694) = 11.016, p < .01$  ;  $F(1,694) = 7.124, p < .01$ ）。また、援助してくれることへのうれしさ（ $F(3,694) = 6.096, p < .01$ ）、および親との対等性（ $F(3,694) = 3.574, p < .05$ ）において年代による主効果がみられ、多重比較の結果、前者は 20・30 代の方が 50 代よりも得点が高く（ $p < .01$ ）、後者は 20 代の方が 50 代よりも得点が高かった（ $p < .05$ ）。

また、男性の親に対する感情では、父親へのポジティブ感情は、年代の主効果が有意であり（ $F(3,694) = 4.790, p < .01$ ）、多重比較の結果、20・30 代の方が 50 代よりも得点が高かった（ $p < .01$ ）。また、母親へのネガティブ感情は子どもの有無の主効果が有意であり、子どもがいる者はいない者より得点が低かった（ $F(3,694) = 4.978, p < .05$ ）。加えて、父親へのネガティブ感情および母親へのポジティブ感情には、年代と子どもの有無の交互作用がみられた（それぞれ  $F(3,694) = 3.325, p < .05$  ;  $F(3,694) = 2.785, p < .05$ ）。これらの要因に対して単純主効果の検定を行ったところ、父親へのネガティブ感情は、子どもがいる者において 20 代よりも 30・40 代の得点が低く（ $p < .05$ ）、30 代（ $p < .05$ ）、40 代（ $p < .01$ ）、50 代（ $p < .05$ ）では子どものいる者の方がいない者よりも得点が低かった。また、母親へのポジティブ感情は、子どもがいる者において 20・30・40 代の方が 50 代よりも得点が高く（ $p < .01$ ）、30 代では子どもがいる者の方がいない者よりも得点が高いことが示された（ $p < .05$ ）。

ることへのうれしさ、親への心理的援助、親との対等性の 3 領域において有意差がみられ、いずれも男性よりも女性の得点が高かった（それぞれ  $t(1402) = 4.051 ; p < .01$  ;  $t(1402) = 5.331, p < .01$  ;  $t(1402) = 2.622, p < .01$ ）。続けて、親に対する感情（母親・父親に対するポジティブ・ネガティブ感情）について男女差を検討したところ、父親および母親へのネガティブ感情は女性の方が男性よりも低く（それぞれ  $t(1402) = 2.197 ; p < .05$  ;  $t(1402) = 3.093, p < .01$ ）、母親へのポジティブ感情は、男性よりも女性の方が高かった（ $t(1402) = 4.004, p < .01$ ）。

### 3.3 年代と子どもの有無による親に対する意識・感情

男女ごとに、年代と子どもの有無を独立変数、親に対する意識と感情を従属変数とした

成人期の親子関係に関する研究

Table2 年代と実子の有無による親に対する意識・感情（男性）

	n		平均値 (標準偏差)		主効果		交互作用	
	年代	実子あり	実子なし	実子あり	実子なし	年代		子ども有無
援助してくれることへのうれしさ	20代	25	190	4.184 (0.828)	3.857 (0.978)	6.096 **	11.016 **	0.674
	30代	80	132	4.013 (0.813)	3.680 (0.938)	20・30代>50代	子有>子無	
	40代	96	74	3.879 (1.003)	3.492 (0.839)			
	50代	56	49	3.521 (0.962)	3.453 (1.035)			
20代	25	190	3.936 (0.885)	3.643 (0.945)	1.721			7.124 **
親への心理的援助	30代	80	132	3.758 (0.788)	3.435 (0.895)	20代>50代	子有>子無	
	40代	96	74	3.735 (0.902)	3.468 (0.680)			
	50代	56	49	3.486 (0.917)	3.522 (1.006)			
	20代	25	190	3.667 (1.114)	3.696 (0.955)			3.574 *
親との対等性	30代	80	132	3.800 (0.762)	3.508 (0.813)	20代>50代		
	40代	96	74	3.670 (0.922)	3.369 (0.760)			
	50代	56	49	3.327 (0.907)	3.347 (1.007)			
	20代	25	190	3.413 (0.924)	3.377 (0.942)		0.576	0.677
親への養護性	30代	80	132	3.321 (0.809)	3.250 (0.918)	20・30代>50代		
	40代	96	74	3.458 (0.853)	3.306 (0.778)			
	50代	56	49	3.292 (0.895)	3.286 (1.089)			
	20代	25	190	3.456 (1.212)	3.602 (0.967)		4.790 **	2.809
父親へのポジティブ感情	30代	80	132	3.743 (0.934)	3.477 (0.910)	20・30代>50代		
	40代	96	74	3.610 (0.828)	3.195 (0.924)			
	50代	56	49	3.211 (0.991)	3.184 (0.925)			
	20代	25	190	2.566 (1.309)	2.254 (0.998)		3.379 *	6.626 **
父親へのネガティブ感情	30代	80	132	1.916 (1.011)	2.242 (1.010)	20・30・40代>50代	子無>子有	子有の場合：20代>30・40代
	40代	96	74	1.871 (0.894)	2.367 (1.052)			30・40・50代：子有<子無
	50代	56	49	2.145 (1.035)	2.569 (1.091)			
	20代	25	190	4.144 (0.670)	3.804 (0.968)			6.287 **
母親へのポジティブ感情	30代	80	132	3.980 (0.855)	3.667 (0.813)	20・30・40代>50代	子有>子無	子有の場合：20・30・40代>50代
	40代	96	74	3.831 (0.847)	3.624 (0.736)			30代：子有>子無
	50代	56	49	3.339 (1.003)	3.588 (0.738)			
	20代	25	190	2.006 (1.058)	2.150 (1.007)			1.399
母親へのネガティブ感情	30代	80	132	1.854 (0.938)	2.098 (0.915)	20・30・40代>50代	子無>子有	
	40代	96	74	1.789 (0.907)	1.996 (0.871)			
	50代	56	49	2.028 (1.032)	2.195 (1.008)			

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

次に、女性の結果を示す (Table3)。女性における親に対する意識では、援助してくれることへのうれしさに年代の主効果がみられ ( $F(3,694) = 2.842, p < .05$ )、多重比較の結果、20代の方が50代よりも得点が高かった ( $p < .05$ )。女性の親に対する感情では年代と子どもの有無の主効果がみられ、父親および母親へのポジティブ感情は子どもがいる者の方がいない者よりも得点が高く (それぞれ  $F(1,694) = 8.880, p < .01$ ;  $F(1,694) = 4.315, p < .05$ )、父親へのネガティブ感情は、子どもがいる者の方がいない者よりも得点が低かった ( $F(1,694) = 15.008, p < .05$ )。また母親へのポジティブ感情は年代による主効果がみられ ( $F(3,694) = 10.388, p < .01$ )、多重比較の結果、20代>40代 ( $p < .05$ )、20・30代>50代 ( $p < .01$ )、40代>50代 ( $p < .05$ ) であることが示された。

Table3 年代と実子の有無による親に対する意識・感情（女性）

	n		平均値（標準偏差）		主効果	交互作用		
	年代	実子あり	実子なし	実子あり		年代	子の有無	
援助してくれることへのうれしさ	20代	29	189	4.048 (1.011)	4.143 (0.874)	20代>50代	3.184	1.054
	30代	100	99	4.148 (0.957)	3.836 (1.082)			
	40代	96	80	4.015 (1.045)	3.760 (1.093)			
	50代	67	42	3.794 (0.973)	3.657 (0.797)			
親への心理的援助	20代	29	189	3.890 (0.976)	3.915 (0.916)	0.474	1.296	0.339
	30代	100	99	3.880 (0.848)	3.723 (0.972)			
	40代	96	80	3.900 (0.964)	3.725 (0.892)			
	50代	67	42	3.925 (0.805)	3.871 (0.843)			
親との対等性	20代	29	189	3.816 (1.006)	3.910 (0.908)	2.607	0.616	0.743
	30代	100	99	3.767 (0.934)	3.576 (1.021)			
	40代	96	80	3.611 (0.932)	3.617 (0.883)			
	50代	67	42	3.602 (0.748)	3.444 (0.724)			
親への養護性	20代	29	189	3.414 (0.946)	3.369 (0.945)	1.678	0.123	0.177
	30代	100	99	3.283 (0.938)	3.219 (1.051)			
	40代	96	80	3.378 (0.894)	3.442 (0.966)			
	50代	67	42	3.522 (0.783)	3.452 (1.092)			
父親へのポジティブ感情	20代	29	189	3.738 (1.024)	3.597 (1.123)	2.275	8.880 **	0.280
	30代	100	99	3.690 (1.073)	3.331 (1.076)			
	40代	96	80	3.681 (1.032)	3.428 (1.124)			
	50代	67	42	3.469 (0.914)	3.114 (0.981)			
父親へのネガティブ感情	20代	29	189	1.975 (1.057)	2.182 (0.981)	0.270	15.008 **	0.203
	30代	100	99	1.847 (0.865)	2.214 (1.009)			
	40代	96	80	1.860 (1.070)	2.236 (1.020)			
	50代	67	42	1.938 (0.941)	2.330 (1.086)			
母親へのポジティブ感情	20代	29	189	4.262 (0.701)	4.135 (0.869)	10.388 **	4.315 *	0.569
	30代	100	99	4.124 (0.914)	3.848 (0.979)			
	40代	96	80	3.888 (1.023)	3.850 (1.006)			
	50代	67	42	3.621 (0.928)	3.390 (0.790)			
母親へのネガティブ感情	20代	29	189	1.872 (0.922)	1.930 (0.880)	0.592	2.376	0.269
	30代	100	99	1.713 (0.914)	1.916 (0.890)			
	40代	96	80	1.821 (0.994)	1.879 (0.884)			
	50代	67	42	1.868 (0.920)	2.037 (0.895)			

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

### 3.4 婚姻状況による親への意識・感情

婚姻状況による親に対する意識・感情について男女ごとに検討した。その際、子ども側の発達段階の違いを考慮し、対象者を20・30代（成人前期）と40・50代（成人中期）の2群に分け、男女および年齢層（成人前期・成人中期）の4群に対して、婚姻状況を要因とする一要因分散分析を行った。前述のように、本研究では死別者の人数が6名と少数であったため、分析から除き、未婚者、既婚者、離別者の3群の比較を行った。

Table4 婚姻状況による親に対する意識・感情（男性）

		成人前期（20・30代）				成人中期（40・50代）					
		n	平均値	標準偏差	F値	多重比較	n	平均値	標準偏差	F値	多重比較
援助してくれることへのうれしさ	未婚	272	3.773	(0.941)	2.903	86	3.521	(0.926)	9.634 **	離別<未婚・既婚	
	既婚	146	4.001	(0.903)		159	3.796	(0.915)			
	離婚	9	3.756	(1.139)		29	2.993	(1.138)			
親への心理的援助	未婚	272	3.549	(0.936)	2.793	86	3.488	(0.789)	6.480 **	離別<既婚	
	既婚	146	3.758	(0.826)		159	3.704	(0.858)			
	離婚	9	3.400	(1.095)		29	3.110	(1.050)			
親との対等性	未婚	272	3.587	(0.887)	2.907	86	3.353	(0.879)	6.107 **	離別<既婚	
	既婚	146	3.797	(0.873)		159	3.600	(0.861)			
	離婚	9	3.444	(1.190)		29	3.023	(1.050)			
親への養護性	未婚	272	3.311	(0.916)	0.905	86	3.310	(0.904)	1.804		
	既婚	146	3.384	(0.878)		159	3.419	(0.803)			
	離婚	9	3.000	(1.167)		29	3.092	(1.215)			
父親へのポジティブ感情	未婚	272	3.531	(0.933)	1.042	86	3.151	(0.906)	10.321 **	離別<未婚<既婚	
	既婚	146	3.673	(1.005)		159	3.535	(0.862)			
	離婚	9	3.622	(1.070)		29	2.834	(1.023)			
父親へのネガティブ感情	未婚	272	2.311	(0.979)	5.426 **	既婚・離別<未婚	86	2.551	(1.055)	17.806 **	既婚<未婚・離別
	既婚	146	2.055	(1.120)			159	1.886	(0.866)		
	離婚	9	1.460	(0.456)			29	2.714	(1.267)		
母親へのポジティブ感情	未婚	272	3.729	(0.889)	3.527 *	未婚<既婚	86	3.595	(0.729)	0.483	
	既婚	146	3.971	(0.873)			159	3.672	(0.893)		
	離婚	9	3.844	(1.108)			29	3.524	(0.967)		
母親へのネガティブ感情	未婚	272	2.199	(0.940)	7.775 **	既婚<未婚	86	2.161	(0.958)	3.574 *	既婚<未婚
	既婚	146	1.873	(1.008)			159	1.837	(0.922)		
	離婚	9	1.397	(0.478)			29	2.089	(1.003)		

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

はじめに、男性の結果を Table4 に示す。男性の 20・30 代では、親への感情において婚姻状況による有意差がみられ、父親へのネガティブ感情は未婚者よりも既婚・離別者で低いこと ( $F(2,424)=5.426, p<.01$ )、母親へのポジティブ感情は既婚者の方が未婚者よりも高く ( $F(2,424)=3.527, p<.05$ )、母親へのネガティブ感情は未婚者より既婚者で低いこと ( $F(2,424)=7.775, p<.01$ ) が示された。一方、40・50 代の男性では、親に対する意識のうち、援助してくれることへのうれしさが離別者より未婚者および既婚者で高く ( $F(2,271)=9.634, p<.01$ )、親への心理的援助および親との対等性は離別者より既婚者の方が高いこと (それぞれ  $F(2,271)=6.480, p<.01$ ;  $F(2,271)=6.107$ ) が示された。また、男性の親に対する感情では、父親へのポジティブ感情は離別<未婚<既婚の順であり ( $F(2,271)=10.321, p<.01$ )、父親へのネガティブ感情は既婚者<未婚・離別者 ( $F(2,271)=17.806, p<.01$ )、母親へのネガティブ感情は未婚者より既婚者で低いこと ( $F(2,271)=3.574, p<.05$ ) が示された。

Table5 婚姻状況による親に対する意識・感情（女性）

		成人前期（20・30代）					成人中期（40・50代）				
		n	平均値	標準偏差	F値	多重比較	n	平均値	標準偏差	F値	多重比較
援助してくれることへのうれしさ	未婚	239	3.968	(0.957)	3.234*	未婚<既婚	74	3.686	(0.886)	6.148**	離別<既婚
	既婚	161	4.214	(0.936)			166	3.999	(0.981)		
	離婚	16	3.975	(1.164)			41	3.449	(1.221)		
親への心理的援助	未婚	239	3.780	(0.970)	2.347	74	3.776	(0.791)	2.741		
	既婚	161	3.981	(0.807)		166	3.942	(0.863)			
	離婚	16	3.813	(1.109)		41	3.605	(1.101)			
親との対等性	未婚	239	3.752	(0.955)	0.795	74	3.527	(0.778)	2.663		
	既婚	161	3.859	(0.943)		166	3.665	(0.827)			
	離婚	16	3.646	(1.112)		41	3.341	(0.970)			
親への養護性	未婚	239	3.317	(0.967)	0.002	74	3.577	(0.962)	1.107		
	既婚	161	3.311	(0.960)		166	3.408	(0.855)			
	離婚	16	3.313	(1.158)		41	3.350	(1.100)			
父親へのポジティブ感情	未婚	239	3.481	(1.147)	1.714	74	3.235	(0.982)	4.761**	未婚<既婚	
	既婚	161	3.687	(1.039)		166	3.625	(1.008)			
	離婚	16	3.625	(0.888)		41	3.254	(1.163)			
父親へのネガティブ感情	未婚	239	2.253	(1.006)	7.859**	既婚<未婚	74	2.402	(0.994)	8.276**	既婚<未婚
	既婚	161	1.866	(0.903)			166	1.852	(1.012)		
	離婚	16	2.018	(0.801)			41	2.244	(1.090)		
母親へのポジティブ感情	未婚	239	4.029	(0.921)	0.902	74	3.622	(0.932)	7.360**	離別<既婚	
	既婚	161	4.148	(0.868)		166	3.899	(0.916)			
	離婚	16	3.988	(1.011)		41	3.293	(1.138)			
母親へのネガティブ感情	未婚	239	1.974	(0.870)	4.800**	既婚<未婚	74	1.992	(0.879)	9.695**	既婚<離別
	既婚	161	1.701	(0.901)			166	1.705	(0.851)		
	離婚	16	2.027	(1.013)			41	2.369	(1.131)		

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

続けて、女性の結果を Table5 に示す。女性の 20・30 代では、親に対する意識のうち、援助してくれることへのうれしさで婚姻状況による違いがみられ、未婚者より既婚者で得点が高かった ( $F(2,413) = 3.234, p < .05$ )。また、親に対する感情では、父親および母親へのネガティブ感情が、未婚者よりも既婚者の得点が低かった（それぞれ  $F(2,413) = 7.859, p < .01$  ;  $F(2,413) = 4.800, p < .01$ ）。40・50 代の女性では、親に対する意識のうち、援助してくれることへのうれしさが離別者より既婚者で得点が高かった ( $F(2,278) = 6.148, p < .01$ )。また、女性の親への感情では、父親へのポジティブ感情が未婚者よりも既婚者で高く ( $F(2,278) = 4.761, p < .01$ )、父親へのネガティブ感情が未婚者より既婚者の方が低いこと ( $F(2,278) = 8.276, p < .01$ )、母親へのポジティブ感情は離別者より既婚者で高く ( $F(2,278) = 7.360, p < .01$ )、母親へのネガティブ感情は離別者より既婚者の方が低いこと ( $F(2,278) = 9.695, p < .01$ ) が示された。

### 3.5 親の老いの認知と親に対する意識・感情の関連

子ども側から父親・母親の老いをどの程度認知しているかについて、性×年代の二要因分散分析を行った結果、父親の老いの認知、母親の老いの認知ともに年代の主効果のみがみられた（それぞれ  $F(3,694) = 40.022, p < .01$  ;  $F(3,694) = 46.856, p < .01$ ）。年代による違いについて多重比較を行った結果、父親の老いの認知は、20代<30代<40代<50代（30代



と 40 代の間は  $p < .05$  ; それ以外は  $p < .01$ ), 母親の老いの認知は 20・30・40代<50代 ( $p < .01$ ), 20代<40代 ( $p < .01$ ) であった (Table6)。

Table6 性・年代による親の老いの認知

	n		平均値 (標準偏差)				主効果	交互作用
	年代	男性	女性	男性	女性	性		
母親の老い	20代	215	218	3.419 (1.000)	3.456 (0.990)	0.034	40.022**	0.622
	30代	212	199	3.514 (0.929)	3.561 (0.938)		20・30・40代<50代	
	40代	170	176	3.697 (0.881)	3.721 (1.150)		20代<40代	
	50代	105	109	4.335 (0.989)	4.268 (0.981)			
父親の老い	20代	215	218	3.482 (1.028)	3.519 (1.027)	0.005	46.856**	0.177
	30代	212	199	3.698 (0.998)	3.806 (0.915)		20代<30代<40代<50代	
	40代	170	176	3.968 (0.868)	3.941 (1.062)			
	50代	105	109	4.497 (0.963)	4.394 (0.953)			

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

続けて、子ども側からみた親の老いの程度と親に対する意識および感情の関連を検討するため、父親・母親の老い得点と親に対する意識 4 領域および父親・母親に対する感情 (ポジティブ・ネガティブ) の相関係数を男女ごとに算出した (Table7)。その際、50代で親の老いの得点が顕著に高かった点に基づき、対象者を 50 歳未満と 50 代の 2 群に分けて分析を行った。

Table7 親の老いの認知と親に対する意識・感情の相関

	男性				女性			
	50歳未満 (n=597)		50代 (n=105)		50歳未満 (n=593)		50代 (n=109)	
	父親の老いの認知	母親の老いの認知	父親の老いの認知	母親の老いの認知	父親の老いの認知	母親の老いの認知	父親の老いの認知	母親の老いの認知
援助してくれることへのうれしさ	-.094*	-.089*	-.220*	-.268**	-.165**	-.157**	-.0119	-.260**
親への心理的援助	0.008	-0.006	-0.083	-0.156	-0.070	-.102*	0.063	-0.018
親との対等性	-0.038	-0.056	-0.140	-.204*	-.181**	-.205**	-0.096	-0.126
親への養護性	.119**	0.063	0.014	-0.062	-0.042	-0.019	0.041	0.007
父親へのポジティブ感情	-.123**	-0.071	-0.111	-0.061	-.295**	-.085*	-.407**	-0.170
父親へのネガティブ感情	.216**	.216**	.213*	0.178	.324**	.206**	.395**	.192*
母親へのポジティブ感情	-0.069	-.096*	-0.026	-0.119	-.193**	-.271**	-0.156	-.330**
母親へのネガティブ感情	.174**	.253**	0.105	0.173	.199**	.284**	.251**	.317**

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

その結果、まず男性の 50 歳未満群では、父親・母親の老いの認知と父親・母親へのネガティブ感情に、 $r = .22 \sim .25$  程度の弱い正の相関がみられた。男性の 50 代群では、父親・母親の老いの認知と援助してくれることへのうれしさに、それぞれ  $r = -.220$  ( $p < .05$ ),  $r$

$r = -.268$  ( $p < .01$ ) の弱い負の相関がみられるとともに、父親の老いの認知と父親へのネガティブ感情に  $r = .213$  ( $p < .05$ ) の弱い正の相関がみられた。

続けて、女性の 50 歳未満群では、父親の老いと父親へのポジティブ感情 ( $r = -.295$ ,  $p < .01$ ) およびネガティブ感情 ( $r = .324$ ,  $p < .01$ ) の間に有意な弱い相関がみられた。同様に、母親の老いと母親へのポジティブ感情 ( $r = -.271$ ,  $p < .01$ ) およびネガティブ感情 ( $r = .284$ ,  $p < .01$ ) の間にも有意な弱い相関がみられた。50 代女性では、母親の老いの認知と援助してくれることへのうれしさの間に  $r = -.260$  ( $p < .01$ ) の弱い負の相関がみられるとともに、父親の老いと父親へのポジティブ感情 ( $r = -.407$ ,  $p < .01$ ) およびネガティブ感情 ( $r = .395$ ,  $p < .01$ ) の間に有意な中程度の相関がみられた。同様に、母親の老いと母親へのポジティブ感情 ( $r = -.330$ ,  $p < .01$ ) およびネガティブ感情 ( $r = .317$ ,  $p < .01$ ) の間に有意な弱い相関がみられた。

## 4. 考察

### 4.1 親に対する意識と感情の男女差

本研究は成人期の親子関係の一側面として、子ども側の視点に焦点を当て、検討を行った。具体的には、子ども側の性や年代、子どもの有無、婚姻状況とともに、子どもが認知する親の老いの状況を尋ね、それらと親に対する意識・感情の関連をとらえた。

その結果、まず全体の傾向として、親に対する意識 (4 領域) のうち、援助してくれることへのうれしさの得点が高いことが示された。中でも、男性では 20・30 代、女性では 20 代の方が 50 代よりも親からの心理的援助を高く認知していた。高学歴化等に伴う青年期の延長が指摘されるようになって久しく、20 代を成人生成期 (emerging adulthood)

(Arnett, 2000) とする立場もみられることから、青年期に引き続き、成人以降も親から心理的支援を受けているという感覚が強いものと考えられる。さらに本研究では、そうした親からの被援助の意識が 40 代まで高い水準であることが示された。このことから、親が存命である場合、心理的な意味では、子どもは成人中期に入るまで親からの支援を高く認知する傾向があることが示唆される。

次に、男女による親への意識・感情の違いに目を向けると、女性の方が男性よりも親からの心理的援助や親への心理的援助、親との対等性を高く認知しており、感情面では女性の方が男性よりも父親・母親に対する肯定的感情が強く、否定的意識が低いことが示された。これらの結果から、概して女性の方が男性よりも親との心理的結びつきや肯定感情が強く、親との心理的距離が近いことが伺える。一方、親の老いの認知は年代が上がるにつれて高くなっており、これは子ども側の年代が上がるほど父親・母親も高齢となり身体的・心理的・社会的老いが進行することを反映したものであると考えられる。ただし、親の老いの得点には特徴がみられ、50 代の男女で父親・母親の老いの得点が高まっていたことから、平均的な親子の年齢差を考慮すると、親がおよそ 80 代以降になった際に、親の老いを強く実感するようになる傾向があるものと推察される。

以上の傾向をふまえ、以降、年代や子どもの有無、婚姻状況、親の老いの状況による親への意識・感情について男女ごとに考察を行う。

#### 4.2 男性における親に対する意識・感情

男性においては、年代や子どもの有無、婚姻状況によって親に対する意識や感情に違いがみられた。まず、子どものいる男性は子どものいない男性よりも、親からの心理的援助と親に対する心理的援助の双方を高く認知していること、また親に対する感情では、母親へのポジティブ感情が高く、父親・母親に対するネガティブ感情が低いことが示された。加えて、成人前期・中期を通して、既婚者の父母への感情が肯定的である傾向もみられた。中でも年代と子どもの有無の交互作用から、子どものいる男性では20代よりも30代以降の者の方が父親へのネガティブ感情が低いことも示された。男女の初婚年齢の分布や第一子をもうける時期を考慮すると、現代の日本において20代で子どもをもつ男性の割合は低く、本研究で得られたデータも25名であった。そのため、本研究の結果を一般化することは困難であるが、比較的若年で子どもをもうけた男性が、自分自身の親に対してどのような感情を抱くようになるのかについて今後とらえていく必要があると考えられる。また、母親へのポジティブ感情に年代と子どもの有無による交互作用がみられ、子どもがいる男性の場合、40代までの者が50代よりも母親へのポジティブ感情が高いこと、30代では子どものいる者の方がいない者よりも母親へのポジティブ感情が高いことが示された。ここで、対象者自身が養育を受けていた時期の社会背景を考慮すると、伝統的性別役割に基づく母親中心の育児環境のもとで育った者が多いことが推察される。そのため、自分自身が子どもをもうけ子育ての時期にある男性では、かつて家庭の中で中心となって養育してくれた母親が想起されることで、母親に対する肯定感情が高まる傾向があるのではないかと推察される。一方、未だ十分ではないことが指摘されるものの、父親の育児参加が推進される昨今の影響として、今後は成人以降の父親に対する意識も変化していく可能性も考えられる。

さらに男性において、婚姻状況の中でも離別者の父母への感情に関して年代による特徴がみられた。本研究の成人前期（20・30代）の離別者は9名と少数であったため、そこから離別者の特徴を解釈することは困難であるが、他の婚姻状況の者との大きな相違はみられなかった。一方、成人中期（40・50代）の男性離別者では、親からの心理的援助が未婚・既婚者よりも低く、親への心理的援助および親との対等性が既婚者より低いこと、未婚者や既婚者より父親へのポジティブ感情が低く、父親へのネガティブ感情が高いことが示された。一方、母親に対する感情は、離別者とそれ以外の婚姻状況（未婚・既婚）の者との間に違いはみられなかった。これらの結果から、成人中期の離別者では、親との心理的交流が希薄となる傾向があり、特に同性である父親への感情が否定的になりやすいことが伺える。

以上の結果をふまえると、男性において結婚や子どもをもうけることは、親との心理的距離を縮め、父母への肯定感情につながる要因となるのに対し、離別後の男性の親との関係に関しては課題が見出された。本研究の結果は横断調査から得られたものであり、因果関係を同定できるものではないが、離別後の親との心理的交流や、特に同性である父親への感情について、質的な内容も含めて精査することが必要であると考えられる。

加えて、親の老いの認知と親への意識・感情の関連から、20代から50代を通して父親の老いを強く認知しているほど父親へのネガティブ感情が高く、50代未満では母親の老いの認知が高いほど母親へのネガティブ感情が高い傾向がみられた。また、50代では父

母の老いを高く認知するほど親からの心理的援助を低く評価する傾向もみられ、親の老いを実感することにより親を心理的な支えとする意識が低下することも伺えた。しかしながら、これらの相関の値は男性ではいずれも高いものではなかった。親の老いを扱った池田（2017）では、親の老いを否定的に認知しているほど、父母の老いへの悲哀や父親の老いに対する不安、母親の老いに伴う負担懸念が高いこと、親の老いを肯定的に認知しているほど、老いた父母への配慮、母親の老いによる世代継承性が高いことが示されている。一方、本研究では親の身体的・心理的・社会的側面の老いをどの程度認知しているかについて、感情の要素を入れずにとらえた。この相違をふまえると、男性においては親の老いを認知することそのものが親への意識や感情を大きく変化させるのではなく、親の老いに直面した際、それをどのように受け止めるのかという要素が親子関係に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

#### 4.3 女性における親に対する意識・感情

女性における親に対する意識では、男性同様、4領域の中で援助してくれることのうれしさの得点が高く、特に20代女性の方が50代女性よりも親からの心理的援助を高く認知していることが示された。それに対し、親との対等性では、女性において年代による違いはみられなかった。本村（2003）は、成人以降の娘とその親の対等性の認識に関して、親とは基本的には対等なところがあると認識しつつも、親は自分を産み育てた人生の先輩であるため、対等な関係には一生涯ならないという認識も同時にもっているのではないかと述べている。本研究で親との対等性の認識に年代差が見出されなかったのは、本村（2003）が指摘するような親に対する両価的感情が関連していることが考えられる。

続けて、親への感情では、子どもがいる女性の方が子どものいない女性よりも母親・父親へのポジティブ感情が高く、父親へのネガティブ感情が低いことが示された。また20・30代女性では、既婚者の方が未婚者よりも親からの心理的援助を高く認知し、父親・母親に対するネガティブ感情が低いことも示された。これらの結果は、成人同士の母娘関係において、娘の結婚や出産が母娘の心理的距離を縮める（北村・無藤，2003）という知見を支持するものであるといえるだろう。加えて、本研究より、結婚や子どもをもつことが、父親に対する感情も肯定的な方に向かわせる可能性が示唆された。

一方、女性においては、親の老いと父母への感情の関連に特徴的な点が見出された。20代から50代の成人前・中期を通して、父親・母親の老いを実感することが、父母それぞれへの肯定感情を低下させ、否定感情を高めるという関連がみられた。先に示したように、他の年代と比較すると50代女性の母親へのポジティブ感情が低いことや、母親の老いの認知が高いほど親からの心理的援助を低くとらえる傾向があることを合わせると、女性が同性の親である母親の本格的な老いに直面した際に受ける心理的影響は大きく、それまでの母親との心理的交流や母親への肯定感情を必ずしも維持できるわけではない可能性を示唆するものであると考えられる。その背景には、母親の本格的な老いに直面する中で、それまで精神的支えとしてきた母親のイメージが崩れていくことへのショックや悲哀の感情があるのではないかと推察される。同時に、老いに伴って判断力が低下したり自立した生活が困難になったりしていく親との関係においては、物理的な世話の必要性のみならず、コミュニケーション等の心理面でもすれ違いが生じやすく、それらの変化は、女性

にとって心理的結びつきが強かった母親との関係において、より強く感じられるのではないかと考えられる。しかしながら、これらの見解は推測に過ぎないため、今後は、親が後期高齢期から晩年を迎える時期の親子関係に焦点を当て、成人期の子どもにとって強いインパクトをもたらす親の老いとはどのようなものか、またそれらに直面した際の受け止めやその後のプロセスを質的にとらえることで、親の老いの受容を促す要因を含めた知見を得ていく必要があると考えられる。

このように、女性においては、親の老いを認知することによる心理的影響が比較的強い可能性が示されたのに対し、母親へのネガティブ感情に年代や子どもの有無による違いはみられず、婚姻状況においてのみ関連が示された。その特徴として、成人中期（40・50代）の女性では、父親への感情は、未婚者と既婚者の間に有意差がみられ、既婚者の方が未婚者よりも父親へのポジティブ感情が高く、ネガティブ感情が低いという結果であった。それに対し、母親への感情は既婚者と離別者の間に有意差がみられ、離別者の方が既婚者よりも母親へのポジティブ感情が低く、ネガティブ感情が高いという結果であった。本研究の結果は横断調査から得られたものであり、因果関係を同定できるものではないが、離別後の女性において、同性の親である母親に対する感情に何らかの葛藤が生じうる可能性が示唆された。

以上より、女性においては、婚姻関係を結び、その生活を継続する中で、特に異性の親である父親に対する感情が肯定的な方向に向かうこと、一方、親の老いを強く認知することや自分自身の離別の経験が、親を心理的支えとする意識を低下させるとともに父母への感情を否定的な方向に向かわせる可能性が示唆された。中でも、既婚女性と比較すると、離別を経験した女性の母親に対する否定感情が高いことが何に起因するのか、さらに離別を経験した後の親子の心理的交流について、男性同様、精査する必要があると考えられる。

## 5. 本研究のまとめ

成人以降の子どもから親に向けられる意識・感情について、本研究で得られた主な知見を以下にまとめる。

- ・20歳以降の男女ともに親からの心理的支援を高く認知しており、その傾向は40代まで持続する傾向がみられる。
- ・男性では、既婚者や子育て期にある者において、親との心理的交流を強く認知しており、父母への感情も肯定的である傾向がみられる。
- ・女性では、既婚者や子どもがいる者において、未婚者や子どもがいない者よりも父親に対する感情が肯定的である傾向がみられる。
- ・男女ともに50代で親の老いを強く認知しており、親からの心理的支援の認知が低下する。また、親の老いを強く認知しているほど、父母に対する感情が否定的なものとなり、その傾向は特に50代の女性において強い。
- ・成人中期（40・50代）の離別者では、男女とも親との心理的交流が希薄であり、中でも同性の親に対する感情が、他の婚姻状況の者と比較して否定的である傾向がみられる。

## 6. 今後の課題

本研究は、成人期における親に対する意識・感情について、子ども側の視点から検討を行ってきた。調査では、子ども側の性や年代、子どもの有無や婚姻状況を要因として取り上げたが、成人以降の親への意識や感情は、子ども期からの長年にわたる親子関係を反映したものでもあること、また、成人期までに形成された親子の関係性や心理的交流の在り方が成人以降の子どもの生き方の選択やライフスタイルに影響を及ぼしうることに留意する必要がある。そうした長期にわたる親子関係のプロセスおよび親への意識や感情が変化するきっかけを明らかにするためには、面接調査等を用いて質的な内容をとらえていくことがのぞましいと考えられる。また、本研究では親側の発達の変化として親の老いを取り上げたが、今後は親の自活の程度や経済面、父・母の存命状況等とともに、親子の同居の有無、会う頻度、連絡を取り合う頻度等を加えた分析が必要であろう。

### 注

1. web 調査を行った当時の社会情勢に関して補足する。2020年1月からの新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、第一回調査の2021年2月時点では、政府の方針により日本全体で行動制限の取り組みがなされていた。その後、行動制限の緩和と強化が繰り返されたが、第二回調査の2022年2月時点では、行動制限が一定程度緩和されていた。二時点で同じ調査項目を用いて調査を実施したのは、行動制限の有無により親子の関係性に違いが生じる可能性を考慮したものであったが、いずれの変数においても調査年次による違いはほぼ見られなかったため、本研究では両調査のデータを統合して分析を行うこととした。
2. 本研究は、清泉女学院大学短期大学共同研究費の助成を受けて実施しました。

### 引用文献

- Arnett, J.J. (2000). Emerging adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychologist*, 55, 469-480.
- 池田幸恭 (2014) 「成人期を中心とした親に対する感謝の検討」 『和洋女子大学紀要』第54巻, 75-85.
- 池田幸恭 (2017) 「青年期から成人期にわたる親の老いの認知からみた老親との関係」 『日本青年心理学会第25回大会発表論文集』 56-57.
- 北村琴美・無藤 隆 (2003) 「中年期女性が報告する娘との関係と心理的適応との関連」 『心理学研究』 第74巻, 9-18.
- 本村めぐみ (2003) 「脱親期の親子関係における「対等性認識」に関する一研究—脱親期の母娘の認知データを通して」 『高知女子大学生生活科学部紀要』 第52巻, 37-48.
- 小野寺敦子 (2014) 『親と子の生涯発達心理学』 勁草書房
- 若本純子・無藤 隆 (2006) 「中高年期における主観的老いの経験」 『発達心理学研究』 第17巻, 84-93.